

# 多読授業で「言葉への気づき」を促す

深谷素子

## 英語学習から英語読書へ

英語多読の第一目的が英語習得であるというのは、一見自明のこのように思われる。しかし、多読の基本的活動が読書であるという点に立ち返るなら、英語多読を英語学習にとどまらない英語読書という枠組み、それも日本語と英語の違いを超えた「本を読む」という言語活動という大きな枠組みで捉えることが可能である。本論では、大津(2009)が提唱する「ことばへの気づき」をキーワードとし、英語読書を通しての気づきや学びを促す読書指導が、多読授業に広義の言語教育の可能性を開くことを論証する。

## 「ことばへの気づき」

大津は、言語教育を母語教育と外国語教育を一体化したものとして捉え、その目的として、ことばのおもしろさ、豊かさ、怖さへの気づき、ことばの平等性への気づき、ことばを使った自己表現の大切さ、及び、他者の言語表現の的確な理解の大切さへの気づき、の三点を挙げる(2009, p. 28)。さらに、「ことばへの気づき」と言語教育との関連について、次のように説明する。

母語を使って「ことばへの気づき」を育成する。(中略) 育成された「ことばへの気づき」をもとにして外国語の学習を行う。次に、身につけた外国語という、新たな視点を得たことで「ことばへの気づき」が豊かになる。豊かになった「ことばへの気づき」は、母語や外国語の効果的な運用につながり、効果的な運用は「ことばへの気づき」をさらに豊かにし、そうやって豊かになった「ことばへの気づき」は、たとえば、語彙をさらに豊富にしていくというような形で母語に戻ってくる。こうして、循環が形成される。(2011, pp. 36-37)

この考え方は、そのまま多読に応用することができる。母語での読書が言葉への気づきを生み、英語での読書を促す。英語での読書が、言葉への新たな気づきを生み、さらなる発見や学びのスイッチを入れる。これが英語での読書を豊かなものにすると同時に、母語での読書にも好影響を与える。読書を通じての発見や学びが語彙や読解力の向上や、母語と外国語の効果的運用に結びつき、さらなる読書が促される。こういうサイクルが想定できるだろう。そこで、本論では、多読授業において、英語学習としての要素に加え、読書教育を意識した指導を行った場合、学習者にどのような変化や教育効果がもたらされるのか、「ことばへの気づき」や「新たな発見、学び」は生じるのかについて、2011年度に実施した多読授業の方法と結果を基に、一定の回答を提示したいと思う。

## 主体的読書を意識した読書指導

「Active Reading : 英語で読書を楽しむ」と題し、1年生対象の選択英語(通年、シラバスあり)に多読を導入した。受講者は、2クラス、合計46名、英語のレベルは中～上級である。今回の多読受講者が中・上級レベルであった点には注意が必要だろう。基礎的な英語力が身につけていたからこそ、英語力向上より読書指導に力を入れることが可能であった点是否定できないからだ。多読の進め方だが、プレースメントテストで決めたレベルから読み始め、まずは量を読むよう指示し、graded readersからペーパーバックへと徐々に移行させた。授業中は、読書時間を30分から45分ほど取り、残りの45分をアクティビティに用いた。

主体的な読書への関わりを促すため、読書指導のポイントを二つ設定した。第一に、読者が主体となる読書アクティビティを導入し、そこに文学作品を積極的に使用した。文学には読者主体の読書を誘発する傾向が備わっていると考えたからであるが、Widdowson(1975/1989)やMiall & Kuiken(1999)がこれを裏づけている。彼らによれば、文学作品を読む行為は、テキストから要請される既存の意味や概念の書き換えを読者が自ら受け入れる、あるいは選び取ることで初めて成立すると考えられる。そこで、Shel Silversteinの*The Giving Tree*(読み聞かせ+感じたことを英語で書き出す)、Virginia Woolfの最後の手紙(読み聞かせ+真似て別れの手紙を書く)、Raymond Carverの“A Small, Good Thing”(結末部分のみを読み、その前の出来事を想像して書く)、Frederick Douglassの奴隷体験記(第一章を訳読+peer review)、村上春樹の英訳短編“Super-frog Saves Tokyo”(Shared Reading)を、かつこ内に示したアクティビティに使用した。アクティビティ内容も、読者反応理論を参考に、読者がテキストとの交流に主体的に関わることができるものを意識した。

第二のポイントは、各受講者が、主体的に、本当に読みたい本を選べるような足場かけを行うことである。今年度の多読授業開始前のアンケート調査で、「自分の好みの英語の本が見つかる」と答えたのは、46名中6名のみだった。そこで、個別面談や、毎回授業の最後に書いて提出してもらったcommunication sheetを通して、本の好みをはっきりさせる、はっきりしない場合は、これまで読んだことのないジャンルや、教師のお勧め本を騙されたかと思って読んでみるよう勧めることにした。内田(2010)は、「自分の手持ちの価値判断の『ものさし』ではその価値を考量できないものがある」と気づかされる経験をブレークスルーと名づけているが(p. 59)、このブレー

クスルーを狙った、いわば「濫読のススメ」である。濫読する中からブレイクスルーを経験し、事後的に読んでよかったと思えば、そこに新たな学びが成立する。結果として、読者としての自立が期待できる。

## アンケート結果と考察

文学作品を用いたアクティビティに対する受講者の反応は、5段階評価で答えたもらったところ、概して4ポイント前後の高評価だった。もっとも印象に残ったアクティビティに対するコメントを見ると、「新鮮だった、なんらかの発見があった」がもっとも多く20件、「読んだ作品がよかった」が9件あった（ひとつの回答に複数の要素が含まれるため回答のべ数を示す。回答者数46名、以下同様）。アクティビティによって、読んだ作品が新鮮に感じられ、一人で黙読するときには得られないような発見があったことがうかがわれる。

アクティビティに文学作品を用いた印象を尋ねたところ、のべ41のコメントが、文学特有の文章表現や面白さに対する「気づき」を指摘した。難しいと感じたとのコメントも19と多かったが、そのうちの9件は、ポジティブな要素を含むコメントだった。例えば、「むずかしいけど読みごたえありとしました。自分では遠ざけてしまいたいものでも、課題であれば読むので、読んでよかったと思います」とのコメントからは、アクティビティを通して文学作品を強制的に読ませた結果、学習者が事後的にその意義を確認したことが読み取れる。この他、「ふだんと違って新鮮」「食わず嫌いだ」「読めたという達成感があった」など、計12件のコメントに、こうした事後的効果が確認できた。アクティビティはあったほうがいいのかとの質問に対しては、8割以上の受講者があったほうが良いと答えた。なかでも、「ふだん読まないような本を知ることができる」に類するコメント8件には、気づきやブレイクスルーを示唆する表現が見られた。

教師に本を勧めしてほしいかとの質問に対する回答は、勧めしてほしい=60%、どちらでもない=29%、勧めたくない=11%(N=46)となった。勧めしてほしい理由として一番多かったのは、「本の選択へのアドバイスが得られるから」で、のべ22件だった。この中には、「自分だけでは絶対に読もうと思わなかった本との出会いがある」、「様々な作家やジャンルにわたって本を読むことは視野を広げたり色々な分野のポキャブラリーを身近にするといった意味でも大切だと思うから」など、思いがけない本との出会いを肯定的に捉えた回答が6件見られた。教師に勧められた本は面白かったかとの質問に対しても、5割を越す受講者が面白かったと答えており、個別の読書指導が一定の効果を上げたと言える。

次に、多読授業前後の英語読書に対する意識変化について、事前事後アンケートで同じ質問をし、5段階評価での回答の値の差を比較した。「自分の好みの英語の本が見つからない」は0.59ポイント下がった。人数で言うと、「好みの本が見つかる」と答えた人数が、事前の6名から25名に大幅に増えており、読書指導の効果が確認できる。「英語の本を読んで面白かったことがある」は0.85ポイント大きく上昇しており、受講者が英語読書を楽しんだことがわかるが、「英語の本を読んで人生観、世界観が変わった」は、2ポイント台で0.31しか伸びておらず、ブレイクスルーと呼べるほどの読書体験は、一部の受講者にとどまったと見られる。

最後に、英語読書の目的について聞いた回答の値が軒並み下がっている点に注目したい。「ネット情報を読むために英語の本を読む」「新聞、雑誌を読みたいから英語を学ぶ」「英語の本で英語圏の文化、習慣を知りたい」「英語の本を読むと英米文学のよさがわかる」が、0.5ポイント以上下がっているのだが、これは、今回の多読授業の結果、受講者が英語読書に特段の目的を求めなくなったことを示唆していると言えないか。つまり、英語での読書に目的などない、目的は事後的にしか明らかにならないことに「気づいた」結果だと考えられないか。加えて、「英語を読むのが楽しいので内容はなんでもよい」は事前でも2.25と低い値だったのが、さらに0.5ポイント下がって1.75となっており、9割を越す受講者が、「重要なのは英語を読むことではない、英語で書かれた内容だ」と考えるに至ったことを示している。多読授業での英語読書に目的は求めないが、読む内容は重要だとの認識は、英語読書を、英語学習の手段としてではなく、「本を読むという言語活動」として受講者たちが捉え始めた結果と解釈できるのではないだろうか。

以上、多読授業における読書指導が、言葉への気づきや新たな発見を促す言語教育として一定の効果を生むことが確認できた。今後は、こうした多読指導が、読書量や英語力向上に寄与し得るか、ブレイクスルー的読書体験と読書量/英語力向上との相関関係について調査を続けたい。

## 主要参考文献

- Miall, D. S. & Kuiken, D.(1999). What is literariness? Three components of literary reading. *Discourse Processes*, 28(2), 121-138.
- 大津由紀雄（編著）. (2009). 『危機に立つ日本の英語教育』東京：慶應義塾大学出版会.
- 大津由紀雄. (2011). 『ことばへの気づき』を育てる—小学生にとっての英語を考える—. 『佐藤学 内田伸子 大津由紀雄が語る：ことばの学び、英語の学び』東京：ラボ教育センター, 17-46.
- 内田樹 (2008). 『街場の教育論』東京：ミシマ社.
- ウィドウソン, H. G. (1989). 『文体論から文学へ：英語教育の方法』. (田中英史、田口孝夫、訳). 東京：彩流社. (Original work published in 1975)